

〔明清の美術展によせて〕

仇英筆「桃李園金谷園図」と中国の庭園文化

「桃李園金谷園図」(知恩院、図1・2)は、仇英(1494?-1552?)の手に成る、縦206.4cm横120.1cm、絹本着色、2幅対の大作です。仇英は江蘇太倉の人、蘇州を中心とした職業画家で、唐宋の古画を巧みに臨模し、それを自己の制作によく活かしたと言います。仇英の顧客は江南地方の富豪たちでした。彼らは仇英をその邸宅に住ませ、所蔵の古画の複製を依頼したり、その成果を活かした作品制作を注文したりしています。

本作はそれぞれ、金谷園で客人を迎える石崇(249-300)、桃李園で一族の子弟たちと詩宴を楽しむ李白(701-762)を描いたものとされています。石崇は西晋の政治家・詩人ですが、奢侈の限りをつき、最後は愛妾を政敵に譲ることを拒んで死刑になった大富豪としても有名です。洛陽郊外に豪華な金谷園を建設し、美しい侍女を数多く抱え、外出の際には長大な錦の幕を張りめぐらし、大ぶりの珊瑚樹を何株も持っていたなどの逸話が知られています。この錦の幕、珊瑚樹は本作にも描かれています。また、石崇が金谷園で長安へ帰る友人を送るために催した詩宴は、詩ができなかった者は「罰酒三斗」との故事と共に人口に膾炙し、かの王羲之(303-361)も自身の催した蘭亭の宴が金谷の宴に比されたことを非常に喜んだと伝わっています。

一方の桃李園は、「光陰は百代の過客なり」の句で有名な、李白「春夜宴從弟桃花園序」の舞台です。ある暖かい春の晩、唐の大詩人李白は満開の桃花の下、「瓊筵(玉のように美しい敷物)を開きて以て花に坐し、羽觴(羽根を象った杯)を飛ばして月に酔う」と大いに宴を楽しみ、「佳詠(優雅な詩)有らずんば、何ぞ雅懷(高雅な思い)を伸べんや。如し詩成らずんば罰は金谷の酒斗の数に依らん」と詩の競作に熱中したと言います。

「桃李園金谷園図」には、仇英の宋画学習の成果がはっきりと表れています。堂を中心に回廊、橋などを伸ばし、建物の直線によって画面を構成する「金谷園図」の構図は、趙伯驥「風檐展卷図」(台北国立故宫博物院、図3)のような南宋の庭園画と共通していますし、欄干に囲まれた庭園の開けた一角に樹木と人物を配する「桃李園図」の構図は、「文会図」(台北国立故宫博物院、図4)のような北宋絵画に典型的なものと言えます。また、樹叢、亭子の屋根、山の輪郭などを霞にけぶるように描いて、最遠景とする手法も、「焚香祝聖図」(台北国立故宫博物院、部分、図5)のような南宋絵画から学んだものでしょう。侍女や侍童のポーズ、調度品のデザインも、その原型は宋画の中にみつけることができます。具色を多用した衣の文様に

北宋復古の姿勢が認められることも指摘されています。

では、仇英は豊富な宋画学習の蓄積を活かして、どのような絵画世界を表現しようとしたのでしょうか。ここでは仇英画における侍童の役割が宋画におけるそれと微妙に異なることからこの問題を考えてみます。「文会図」や「風檐展卷図」の描写の中心は庭園でくつろぐ高士たちであり、侍童たちはその傍らでそれぞれの役割を果たして、統制のとれた画面が作られています。本作においても、その場の主人とおぼしき人物は侍女たちを従え、樹木を天蓋とするように描かれており、画面の中心は明示されています。ただ、仇英の侍童たちには、宋画には見られない落ち着きのなさのようなものが感じられます。

例えば、「金谷園図」で客の高士の傍らに立つ侍童(図6)は画面の中心とは逆方向に首をひねっており、鑑賞者の注意を引きます。彼は庭園の豪華さに目をみはり、あたりを見回しているようです。また、「桃李園図」で桃の木の下に描かれる、巻物の束を背負った侍童(図7)も、一見、高士たちの集まりとは逆方向へ向かうように見えて目立っていますが、背後に開いた扉と橋が描かれていることから、奥から巻物をとってきて、桃の木を回りこんで高士たちに届けようとしていることがわかります。ここでは、一つの完結したまとまりある画面を作ることより、侍童の動き、さらに庭園の豊かさ、広がり強調されています。「金谷園図」で画面の中心から離れて右端に描かれる、小走りの2人の侍童、「桃李園図」の画面一番手前に鑑賞者に背を向けた形で表される侍童も、庭園の広がり示す存在です。同時に、

「金谷園図」の侍女や侍童が捧げ持つ料理や書画は、華やかな宴の始まりを示し、「桃李園図」の侍童が届けようとする巻物や燭台は、宴がこれからいよいよ盛り上がりていくことを物語ります。彼らの動きが強調されることで、ものがどんどん運びこまれていく宴の活気も表現されているのです。建物の大胆な屈折を用いた活力ある構図、風にたわむ柳や桃の動勢も、宴への期待感、浮ついた気持ちを増幅します。

仇英が金谷園と桃李園をこのように表現した背景には、注文主の意向があったと推測できます。本作はその大きさ、華麗な彩色などから、他の仇英作品と同様に裕福な名士のために作られたと考えられますが、当時の富裕層にとって、都市の中に広大で豪華な庭園を営み、詩宴を催して客を歓待するのは重要な社交活動でした。明代後期には個人の所有する庭園やそこで開かれた雅集を記録する文章が多く作られ、その中には前例、モデルとして金谷園や桃李園に言及するものが散見されます。また、李攀龍(1514-1570)は、ある宴で仇英筆とは別本の「金谷園障子」を見て、その豪華な雰囲気感嘆しています(『滄溟先生集』巻5)。庭園空間の広がり宴の高揚感を強調する、仇英「桃李園金谷園図」には、江南の富豪たちの理想の庭園イメージが重ねられているのではないのでしょうか。(植松瑞希)

※図3、5は、『文藝紹興』(台北国立故宫博物院、2010年)、図4は『大観』(台北国立故宫博物院、2006年)より複写いたしました。

図1 (金谷園)

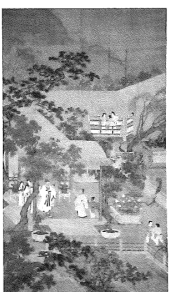


図2 (桃李園)



図3



図4



図5



図6



図7



季刊 美のたより No.179

平成24年 6月30日

発行 大和文華館